No.207

ティーブレイク

Tea Break

メンデルの笑顔

会員　正林　真之

性染色体というのはＸ染色体とＹ染色体の２種類があって，XY の組み合わせで男子が，XX の組み合わせで女子が生まれることになる。これは，中学生くらいの頃に学習する性別についての基本事項である。

では，もし自分が男性であるとして，そのＹ染色体はどこから来たのかというと，それは自分の父親からである。母親からであることは，有り得ない。そしてまた，その父のＹ染色体は，更にそのまたその父親に由来する。こうして考えていけば，何も数学的帰納法のような高度な理論を使わなくとも，男性の場合には，その父親からずっと一つのラインとして継続的にＹ染色体が承継されていることが分かる。要は，「男子継承」というのは要は「Ｙ染色体継承」のことなのである。

なので，あるお祖父さんからしてみれば，自分の息子とその息子の息子（孫）というのは，自分のＹ染色体をそのまま継承していることになる。だがその一方で，娘の息子ということになると，その孫のＹ染色体というのは，自分由来のものではない。これも明らかなことである。

ここで，「果たして自分のＹ染色体を継承しているか否かによって，孫の可愛さに差が生じるのか ?!」と考えた人が居た。そう，前の例で言えば，同じ孫であったとしても，それが息子の息子なのか，それとも娘の息子なのかということで，可愛さに差が出てくるのではないかということである。

実際にそれを，ケンブリッジ大学の M.FOX 教授が，孫の生存率データの統計から証明した。彼が証明したのは実は，祖母のケースである。ちょっと考えてみれば分かるが，父方祖母のＸ染色体というのは，孫娘に引き継がれることはあっても，孫息子に引き継がれることは絶対に無い。すなわち，ある女性の息子には，そのＸ染色体が１本引き継がれるが，その息子の息子となると，引き継がれるのはＹ染色体だけであって，Ｘ染色体は引き継がれない。よって，孫息子のたった一つのＸ染色体というのは，彼の母由来，言い換えれば，祖母から見た義理の娘（嫁）由来のものであって，自分由来のものではない。

これに関し，明治時代の食糧事情があまり良くない時期において，祖母らからのサポート力の差異によって子どもの生存率が大きく左右されることとなった時代という背景下で，かの M.FOX 教授は，同居の父方祖母の存在の有無によって孫娘と孫息子の生存率に差が生じているのかどうかということを追跡したのである。むろん，人の出入りがあまりない地域のデータが選ばれ，国も，日本，ドイツ，カナダ，イングランド，エチオピアというように複数国にわたって調べられたという。その結果，明らかな差異が見られたということで，やはり，孫には自分のＹ染色体なり，Ｘ染色体なりが承継されているのか，そうではないのか，その有無によって可愛さに差が生じることが証明されたわけである。

こうなると，母方祖母というのは，孫にとっては本当に有難い存在で，性別に関係なく孫には優しいのである。ところが，父方祖母の場合には，そうはいかない。孫息子よりも孫娘のほうがえこ贔屓されたりするわけなのだ。祖父については，男子の場合には，父方祖父からは可愛がられるけれども，母方祖父のほうからは可愛がられないということになる。

実際，これを読んでおられるのが男性なのであれば，「ああ，そう言えば，母方の祖母のほうが優しかったなぁ」と思い起こされる方もおられるだろう。実際，２セットの祖父母の中で誰が一番好きだったかと聞くと，たいていは母方の祖母を挙げる男性が多いようなのであ

る。また逆に，女性の場合にも，「そうそう，母方のお祖父ちゃんもお祖母ちゃんも，確かに私のことを可愛がってくれたけれども，父方の祖母のほうがなぜか本当に私のことを可愛がってくれた」と，思い当たるフシがあるだろう。そう，先の理論によれば，彼女のX染色体の由来は，母方の祖父母の場合には可能性でしかないのだけれども，父方の祖母から見れば「確実な」事象だからである。

さてそうなると，我が家の娘は一体どうなるのか。けれども実は，私の娘は，私の母のことを知らない。それは，彼女が生まれるずっと以前に他界してしまっているからである。もし一目でも会わせることができたらなと，今さらながらにそう思う。

けれどもその傍らで，ちょっと不思議なのは，私の娘に対する父の可愛がりようである。この理論からすれば，自分の性染色体を全く受け継いでいない孫娘など，可愛くないはずである。けれども，この可愛がりようというのは，いったい何なのか。

しかしながら実際には，その理由は何となく分かる。いや，何となくではなく，ほぼ確信に近い形で分かる。実は，私の娘の顔は，私の母の顔に本当にそっくりなのである。まさに隔世遺伝である。

生前は，母に対しては何のねぎらいの言葉も，一言の愛の言葉も言わなかった父。この昭和一桁生まれの不器用な男が，なりふり構わずに，自らの性染色体を全く受け継いでいないはずの娘を実に可愛がっている。むしろこちらの風景のほうを，亡き母に見せてあげたかったと，今の自分と同じくらいの年令の遺影の中の母を見るにつけ，しみじみとそう思うのである。